

それから、

roy—mustang

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あいつが死んでから、

俺は生きる意味を失った。

そう、あいつが俺の全てだったんだ。

お前の声がする。

目次

お前の声がする。

「これで本当に良かったの？リヴァイ。」

「ああ。」

今日、エルヴィン・スミスは、死んだ。

巨人との闘いに、よって。

「エルヴィン、おつかれさま。私たちもいつか、そっちに行くからね。」

「エルヴィン、すまない。」

俺のエゴで、

俺の独断で、こいつを殺したようなもんだ。

もうお前は、頑張らなくて、良い。

そう、思っただ。

「きつと、もうすぐ私たちは本当の自由を手にするね、リヴァイ。」

「ああ。」

ここまで本当に、いろいろなことがあった。

俺は、大切な仲間をたくさん失った。

もうこれ以上は、失いたくない。

そう思っていた、はずなのに。

「、、、世界は、残酷だな。ハンジ。」

「そうだね。でも、今に始まったことじゃないよ。リヴァイ。」

「ああ。」

お前を失ってしまった、俺は、

これからどうやって生きていけばいいのだろうか？

「俺には分からない。ずっとずっと、そうだ。」

このやり場のない怒りを、

どこにぶつけたらいいのか。

それさえも、分からなかった。

エレンとアルミン、ミカサが海辺で遊んでいた。

全く、俺の気持ちも知らねえで……

その時、俺はあいつから何か言われた気が、した。

「了解だ……エルヴィン。」

俺が、

この手で。

「リヴァイ兵長？」

「どうしたんですか？」

気づくと、リヴァイ兵長が目の前にいた。

「お前らを殺す……その為にいる。」

「え……？」

呆然と、立ち尽くすあいつらに斬りかかろうと、

ブレードを構えた。

その時だった。

「そんなこと、私は望んでない。」

嘘だ、

信じられない。

そんなはずはない。

「今すぐ武器を捨てなさい、リヴァイ。」

「嫌だ……あいつらのせいで、お前が。」

お前は何故、

どうしてそこまで寛大なんだ？

意味が、分からなかった。

だって、あいつらが居なければ、

お前は死ななかつたはずだ。

お前が巨人化能力を身につけていた、

はずだったのに。

「私はもう十分だった。後は、未来ある人に任せようと、思ったんだ。

だから、彼らから未来を奪うようなことがあつてはならない。」

おまえはいつも、そうだ。

おまえはいつだって、正しい。

「了解だ。エルヴィン。おまえの言うことを、聞こう。」

「それでこそ、私自慢の部下だ。リヴァイ。」

そう言っつて、あいつが笑った。

もつともつと、その笑顔を見てたかった。

「じゃあ、後のことは頼んだよ。」

あいつの存在が、薄くなつていく。

今にも、景色と同化してしまいそうだ。

「嫌だ、行くな。エルヴィン！」

「それは、出来ない。これがこの世の定めだから。」

「俺も五日そこへ行くから！どれくらい時間がかかるか、分からねえが……待つててくれるか？」

「ああ。私はいつまでも待つよ。」

そう言っつて、エルヴィンは消えた。